サーバの保守

この章は、次の内容で構成されています。

- ログ ファイルの管理，1 ページ
- Provisioning のデータ消去の有効化，5 ページ
- メンテナンス モード，7 ページ
- バックアップと復元の実行，8 ページ
- 単一マシンの Provisioning データベースのバックアップ，9 ページ
- 単一マシンの Provisioning データベースの復元，10 ページ
- 分散データベース用の Provisioning のバックアップ，11 ページ
- 分散データベース用の Provisioning の復元，12 ページ
- Provisioning ユーザ インターフェイスを使用したバックアップのスケジュール，15 ページ

ログ ファイルの管理

Provisioning は、Service Enabling Platform（SEP）モジュールのアプリケーション ログ ファイル（sep.log）と、Network Interface and Configuration Engine（NICE）サービスのアプリケーション ログ ファイル（nice.01.log）を記述します。 これらのログ ファイルは、`/opt/cupm/sep/logs` フォルダにあります。

ロギングを無効にすることはできません。 ただし、次の作業を実行できます。

- 必要に応じて、ログ レベルを上げ、さらに多くのデータを収集する
- デフォルトのログ レベル（[標準（NORMAL）]）に戻す

使用可能なログ レベルは次のとおりです。

- [詳細（DETAIL）]（ほとんどの情報が提供される）
- [低（LOW）]

- [標準（NORMAL）]
- [高（HIGH）]
- [緊急（EMERGENCY）]

ログ ファイルは 1 時間ごと、またはログの最大サイズ制限に達するとバックアップされます。 デフォルトのサイズ制限は 20 MB です。 ファイルは、sep.log.date stamp timestamp の形式で保存されます。

（注） ログ ファイルは、Provisioning サーバのサイズが 5000 MB を超えたとき、またはログ フォルダ内のログ ファイルの数が 500 を超えたときに削除されます。 これらのレベルを変更するには、を参照してください。

ログ レベルの変更

手順

ステップ 1 Prime Collaboration Provisioning システムで、`opt/cupm/sep` フォルダに移動します。
インストール中にデフォルトの場所を受け入れた場合、インストール先は /opt/cupm になります。

ステップ 2 dfc.properties ファイルを開き、dfc.log.level プロパティを目的のレベルに変更します。
使用可能なログ レベルは次のとおりです。

- DETAIL
- LOW
- NORMAL
- HIGH
- EMERGENCY

ステップ 3 変更を保存し、Prime Collaboration Provisioning サービスを再起動します。変更内容は Provisioning を再起動しないと有効になりません。

a) SSH を使用してサーバにログインします。
b) /opt/cupm フォルダに移動し、./cupm-app-service.sh stop コマンドを実行します。
c) 次のコマンドを実行して、サービスが停止しているかどうかを確認します。

```
ps -aef | grep startcupm
```

実行中のプロセスがある場合は、次のコマンドを実行して、それらのサービスを停止します。

```
kill -9 <processID1> <processId2>
ps -aef | grep nice
```

実行中のプロセスがある場合は、次のコマンドを実行して、それらのサービスを停止します。

```
kill -9 <processID1> <processId2>
```

d) ポート 46009（JBoss が使用）が解放されているかどうかを確認します。

```
netstat -a | grep 46009
```

ポートが使用中の場合は、解放されるまで待ちます。

e) `./cupm-app-service.sh start` を実行し、アプリケーション サービスを開始します。
サービスが開始するまで待ちます。

（注）

- ログ レベルを永続的に変更するには、CUPM_INSTALL_DIR/sep/build/bin（または /opt/cupm/sep/build/bin）にある dfc.properties ファイルの dfc.log.level の値を変更する必要があります。

  Prime Collaboration Provisioning のログは `/opt/cupm/sep/logs` に保存されています。

- ログ レベルを一時的に変更するには、次の手順を実行します。

  1. SSH を使用し、ルートで Prime Collaboration Provisioning サーバにログインします。
  2. コマンド プロンプトを開いて、スクリプト ディレクトリ `cd CUPM_INSTALL_DIR/sep/ipt/bin` に直接移動します。
  3. 適切なオプションを使用して次のコマンドを実行し、ログ レベルを変更します。

     ```
     ./changeloglevel.sh -level loglevel [APPSERVER | NICE | BOTH]
     ```

     APPSERVER、NICE、または BOTH オプションが指定されない場合は、デフォルトのオプション BOTH が使用されます。

     ログ レベルは DETAIL、LOW、NORMAL、HIGH、または EMERGENCY のいずれかになります。

ログ ファイルの最大サイズの変更

手順

ステップ 1 Prime Collaboration Provisioning システムで、`opt/cupm/sep` フォルダに移動します。
インストール中にデフォルトの場所を受け入れた場合、インストール先は/opt/cupm になります。

ステップ 2 dfc.properties ファイルを開き、dfc.log.maxsize プロパティを目的のレベルに変更します（デフォルトは 20 Mb）。

ステップ 3 変更を保存し、Prime Collaboration Provisioning サービスを再起動します。変更内容は Provisioning を再起動しないと有効になりません。 再起動するには、次の手順を実行します。

a) SSH を使用してサーバにログインします。

b) /opt/cupm フォルダに移動し、./cupm-app-service.sh stop コマンドを実行します。

c) 次のコマンドを実行して、サービスが停止しているかどうかを確認します。

```
ps -aef | grep startcupm
```

実行中のプロセスがある場合は、次のコマンドを実行して、それらのサービスを停止します。

```
kill -9 <processID1> <processId2>
ps -aef | grep nice
```

実行中のプロセスがある場合は、次のコマンドを実行して、それらのサービスを停止します。

```
kill -9 <processID1> <processId2>
```

d) ポート 46009（JBoss が使用）が解放されているかどうかを確認します。

```
netstat -a | grep 46009
```

ポートが使用中の場合は、解放されるまで待ちます。

ステップ 4 次のコマンドを実行して、アプリケーション サービスを開始します。

```
execute ./cupm-app-service.sh start
```

サービスが開始するまで待ちます。

ログの消去レベルの変更

手順

ステップ 1 Prime Collaboration Provisioning システムで、`/opt/cupm/sep` フォルダに移動します。 インストール中にデフォルトの場所を受け入れた場合、インストール先は /opt/cupm になります。

ステップ 2 ipt.properties ファイルを開き、次のいずれかまたは両方を実行します。

- ファイルの最大サイズのレベルを変更するには、dfc.purgelog.maxused_mb プロパティを適切なレベルに変更します。
- ログ ファイルの最大数のレベルを変更するには、dfc.purgelog.maxlogsaved プロパティを適切なレベルに変更します。

ステップ 3 変更を保存し、Prime Collaboration Provisioning サービスを再起動します。変更内容は Provisioning を再起動しないと有効になりません。

a) SSH を使用してサーバにログインします。

b) /opt/cupm フォルダに移動し、./cupm-app-service.sh stop コマンドを実行します。

c) 次のコマンドを実行して、サービスが停止しているかどうかを確認します。

```
ps -aef | grep startcupm
```

実行中のプロセスがある場合は、次のコマンドを実行して、それらのサービスを停止します。

```
kill -9 <processID1> <processId2>
ps -aef | grep nice
```

実行中のプロセスがある場合は、次のコマンドを実行して、それらのサービスを停止します。

```
kill -9 <processID1> <processId2>
```

d) ポート 46009（JBoss が使用）が解放されているかどうかを確認します。

```
netstat -a | grep 46009
```

ポートが使用中の場合は、解放されるまで待ちます。

ステップ 4 次のコマンドを実行して、アプリケーション サービスを開始します。

```
execute ./cupm-app-service.sh start
```

サービスが開始するまで待ちます。

Provisioning のデータ消去の有効化

スケジュールした間隔でデータを消去するように Provisioning を設定できます。

Provisioning は、次のタイプのデータを保持します。

- オーダー：製品のプロビジョニング（エンドポイント、回線、ボイスメール、またはいずれかのバンドルなど）のオーダーが行われると、オーダーデータのオブジェクトが作成され、システムに保存されます。
- サービス アクション：製品のプロビジョニング中に、アプリケーションがデバイスと通信すると作成されるオブジェクト。 デフォルトでは、サービス アクション データの消去が有効になっています。
- タスク：インフラストラクチャ設定の更新のスケジュール。 インフラストラクチャ設定によって、設定をローカルに保存できます。 保存された設定はタスクに組み込み、デバイスにプッシュできます。
- ワークフロー：製品のオーダーが行われると、ワークフロー（承認、出荷、受領）を通過してから、サービス アクティベータに届きます。
- 監査証跡：暗証番号/パスワードは変更するたびにリセットされ、次回のログオン時に変更されて、Unity または Unity Connection デバイス内のユーザのボイス メールがロック解除され、監査エントリが作成されます。

（注） データは、保持期間または保持数の基準に達すると消去されます。 たとえば、データが保持期間より古い場合は削除されます。 また、データの合計が保持数を超えると、データは削除されます。

手順

ステップ 1 [管理（Administration）]>[システムのセットアップ（System Setup）]>[データメンテナンス（Data Maintenance）] を選択します （スタンドアロンの Prime Collaboration Provisioning アプリケーションの操作については、表 1-1 を参照してください）。

ステップ 2 消去をスケジュールするデータの行にあるチェックボックスをオンにします。

ステップ 3 [日単位の保持期間（Retention Time in Days）] カラムで、データを保持する日数を変更します（デフォルトは 7 日間で、サービス アクションの場合のみ 30 日間）。

ステップ 4 [保持数（Retention Count）] カラムで、保持するデータの数を選択します。

（注） 保持数は、Provisioning で保持して消去しないオブジェクトの数です。 たとえば、オーダー総数が 1000 で、保持数が 200 の場合、Provisioning では 800 のオーダーが消去され、最新の 200 オーダーだけが保持されます。

[保持数（Retention Count）] のデフォルト設定は次のとおりです。

- [順序（Orders）]：最新の 100 オーダー
- [サービスアクション（ServiceAction）]：無制限
- [タスク（Task）]：50
- [ワークフロー（Workflow）]：50
- [監査証跡（Audit Trail）]：50

ステップ 5 （オプション）消去されたデータを削除する前にファイルへエクスポートするには、[エクスポート後に消去（Export Before Purge）] フィールドで [はい（Yes）] を選択し、データの保存先となるディレクトリの場所を入力します。
エクスポートされるのはオーダー データとワークフロー データだけです。 サービス アクション データはエクスポートされません。

ステップ 6 消去間隔を選択し（デフォルトは 24 時間）、[更新（Update）] をクリックします。
[消去情報（Purging Information）] ペインに、次にスケジュールされている消去と前回の消去の時期が表示されます。

プロビジョニング データを消去するには、[管理（Administration）] > [システムのセットアップ（System Setup）] > [データメンテナンス（Data Maintenance）] を選択します（スタンドアロンの Prime Collaboration Provisioning アプリケーションでは、[管理（Administration）] > [システムメンテナンス（System Maintenance）] > [データメンテナンス（Data Maintenance）] を選択します）。
[データメンテナンスの設定（Data Maintenance Configuration）] ページでデータを設定できます。

メンテナンス モード

Provisioning をメンテナンス モードにすると、ドメイン、プロセッサ、サービス エリアの削除など、通常モードでは使用できない、ユーザに影響を与える操作を行うことができます。

管理者以外のすべてのユーザは、割り当てられた権限ごとに Provisioning 以外のすべてのページにアクセスできます。 Provisioning のリンクは利用可能ですが、ユーザがこれらのページにアクセスしようとすると、「アプリケーションは、現在メンテナンス モードです（the application is currently in Maintenance mode）」というメッセージが表示されます。

手順

ステップ 1 [管理（Administration）] > [システムのセットアップ（System Setup）] > [Provisioningのセットアップ（Provisioning Setup）] > [メンテナンスモード（Maintenance Mode）] を選択します（スタンドアロンの Prime Collaboration Provisioning アプリケーションの UI 操作については、Prime Collaboration Provisioning の統合またはスタンドアロン ユーザ インターフェイスを参照してください）。
[アプリケーションモード管理（Application Mode Management）] ページが表示され、次のメッセージが表示されます。

「メンテナンスモードを終了すると、すべてのユーザのアクセスが回復します。 プロセッサ(コールプロセッサ、ユニファイドメッセージプロセッサ)、AAAサーバ、ドメイン、サービスエリアの削除操作は実行できなくなります。 （Exiting Maintenance mode will restore access to all users. Delete operations on processors (Call Processors, Unified Message Processors), LDAP and ACS Servers, Domains, and Service Areas will no longer be available.）」

ステップ 2 [メンテナンスモード開始までの遅延時間(分)（Delay Before Maintenance Mode Begins (mins)）] ドロップダウン リストから遅延時間を選択します。 選択可能な遅延時間は 1 ～ 60 分です。 ただちに Provisioning をメンテナンス モードにするには、[即時（Immediately）] を選択します。

ステップ 3 [ログインしたユーザに表示するメッセージ（Message to Display to Logged-in Users）] で、メッセージを入力します。 このメッセージはログインしたユーザの画面に表示されます。 200 文字まで入力できます。

ステップ 4 [メンテナンスモードの開始（Enter Maintenance Mode）] をクリックし、次に [はい（Yes）] をクリックして確定します。
ログイン ページに警告が表示され、システムの使用は管理権限を持つユーザに制限されることがユーザに通知されます。 ドメインの削除など、通常モードでは使用できないメンテナンス オプションが使用可能になります。

ステップ 5 ドメインの削除などのメンテナンス アクティビティを実行します。

ステップ 6 メンテナンス アクティビティが完了したら、[メンテナンスモード（Maintenance Mode）] を選択します。

ステップ 7 [メンテナンスモードの終了（Exit Maintenance Mode）] をクリックします。

ログインページの警告が消え、ユーザは通常通りにログインできるようになります。 ドメインの削除などのメンテナンス オプションは、もう使用できません。

Provisioning がメンテナンス モードを開始すると、管理者全員に電子メール通知が送信されます。電子メール通知を送信するには、次の通知イベントを有効にする必要があります。

[システムがメンテナンスモードを開始したときまたは終了したとき(ログインした管理者に電子メールが送信されます)（When system enters or exits Maintenance Mode (email will be sent to the logged in administrators)）]

通知設定を行うには、システム通知の設定 を参照してください。

バックアップと復元の実行

Prime Collaboration では、データをバックアップして復元することができます。 Provisioning の UI を使用して定期バックアップをスケジュールするか、あるいはシステムに管理者ユーザ（CLI ユーザ）としてログインし、手動でバックアップ コマンドを実行できます。 ただし復元コマンドは、システムに管理者ユーザ（CLI ユーザ）としてログインし、手動で実行する必要があります。

バックアップと復元のシナリオには次の 2 種類があります。使用するシナリオに適した手順を選択してください。

- 単一マシン用のバックアップと復元のシナリオ。同一インストールまたは新規インストールで使用します。 このシナリオについては、単一マシンの Provisioning データベースのバックアップ, （9 ページ）および単一マシンの Provisioning データベースの復元, （10 ページ）を参照してください。
- 分散データベース用のバックアップと復元のシナリオ。同一インストール、同一 IP アドレスを使用した新規インストール、または新しい IP アドレスを使用した新規インストールで使用します。 このシナリオについては、分散データベース用の Provisioning のバックアップ, （11 ページ）および分散データベース用の Provisioning の復元, （12 ページ）を参照してください。

（注） ファイルをバックアップする場合は、そのファイルを別のファイル サーバに置く必要があります。 また、バックアップ データは CD にも焼き付けてください。

Provisioning では、システム データをバックアップし、システム全体の障害発生時に別のシステム上で復元することができます。 別のシステムからのバックアップを復元する場合は、次の要件を満たす必要があります。

- データの復元先のアプリケーション サーバがバックアップ対象システムと同じ MAC アドレスを持つことを確認します（IP アドレスとホスト名は異なっていても可）。

- 元のシステム（バックアップされるシステム）の MAC アドレスを別のシステムに割り当てることができない場合は、新しいライセンス ファイル（新規 MAC アドレス用）の情報について Cisco TAC にお問い合わせください。
- 異なるシステムでデータのバックアップと復元を行う手順は、同一システムでデータのバックアップと復元を行う手順と同じです。

単一マシンの Provisioning データベースのバックアップ

この手順を実行するには、Provisioning データベース（PostgreSQL データベース）に管理者レベルでアクセスできる必要があります。

手順

ステップ 1 SSH を使用してルートでログインします（ポート 22）。

ステップ 2 **/opt/cucm** フォルダに移動し、次のコマンドを入力します。

```
./cupm-app-service.sh stop
```

ステップ 3 次のコマンドを使用して、Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを停止します。

```
ps -aef | grep startcupm
ps -aef | grep nice
kill -9 <startcupm process ID>
kill -9 <nice process ID>
```

ステップ 4 次のコマンドを使用して、対象のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/postgres/9.0/bin
```

ステップ 5 次のコマンドを実行します。

```
./pg_dumpall -o -Upmadmin > /<backup_directory_name>/<backup_file_name>
```

値は次のとおりです。

- pmadmin：postgres ユーザ ID。
- *backup_directory_name*：バックアップ ファイルを置く場所のディレクトリ名。
- *backup_file_name*：バックアップはこのファイル名で作成されます。

ステップ 6 バックアップ フォルダで、次のファイルとディレクトリのコピーを作成します。

- /opt/cupm/sep/dfc.properties
- /opt/cupm/sep/ipt.properties
- /opt/cupm/sep/dfc.keystore
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/conf/login-config.xml
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/deploy/dfc-ds.xml

ステップ 7 次のコマンドを使用して、Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを開始します。

```
cd /opt/cupm
./cupm-app-service.sh start
```

単一マシンの Provisioning データベースの復元

はじめる前に

新規インストールに復元する場合は、この手順を開始する前に、システムを新規インストールで起動して稼働させます。 この手順を実行するには、Provisioning データベース（PostgreSQL データベース）に管理者レベルでアクセスできる必要があります。

データベースを新しいシステムに復元する場合は、次のポートが他のアプリケーションで使用されていないことを確認してください。

- dfc.jboss.port=46008
- dfc.postgres.port=5432
- dfc.nice.rmi.registry.internal.port=46001
- dfc.webport=80

ポートが他のアプリケーションで使用されている場合は、対象のポート番号を空いているポートに変更する必要があります。 これらの設定は、/opt/cupm/sep/dfc.properties ファイルに定義されています。 インストール中にデフォルトの場所を受け入れた場合、インストール ディレクトリは /opt/cupm になります。

手順

ステップ 1 SSH を使用してルートでログインします（ポート 22）。

ステップ 2 **/opt/cucm** フォルダに移動し、次のコマンドを入力します。

```
./cupm-app-service.sh stop
```

ステップ 3 次のコマンドを使用して、Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを停止します。

```
ps -aef | grep startcupm
ps -aef | grep nice
kill -9 <startcupm process-id>
kill -9 <nice process-id>
```

a) nice プロセスが postgres 接続をまだ保持しているかどうかチェックするには、次のコマンドを入力します：

```
ps -aef
```

b) 次のプロセスを検索します：/opt/cupm/jvm/bin/java -server -classpath /opt/cupm/sep/lib/dom.jar:/opt/cupm/sep/lib/jaxbapi.jar:/opt/cupm/sep/lib/jaxb-impl.jar
プロセスが実行中の場合は、次のコマンドを入力します。

```
kill -9 <Process-Id found earlier>
```

ステップ 4 同一インストールに復元する場合は、次の手順に進みます。新規インストールに復元する場合は、次のバックアップ ファイル（bak）をコピーします。

ステップ 5 次のコマンドを使用して、対象のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/postgres/9.0/bin
```

ステップ 6 次のコマンドを実行します。

```
./CUPM-restore.sh <username> <password> /mnt/<backup_file_name>
```

ここで、username は PostgreSQL 管理者のユーザ名です。 デフォルトの管理者ユーザ名は pmadmin です。パスワードは globaladmin に入力したものと同じです。

ステップ 7 同一インストールに復元する場合は、次の手順に進みます。 新規インストールに復元する場合は、次のバックアップ ファイルをコピーします。

- /opt/cupm/sep/dfc.properties
- /opt/cupm/sep/ipt.properties
- /opt/cupm/sep/dfc.keystore
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/conf/login-config.xml
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/deploy/dfc-ds.xml

ステップ 8 次のコマンドを使用して、Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを開始します。

```
cd /opt/cupm
./cupm-app-service.sh start
```

分散データベース用の Provisioning のバックアップ

この手順を実行するには、Provisioning データベース（PostgreSQL データベース）に管理者レベルでアクセスできる必要があります。

手順

ステップ 1 SSH を使用してルートでログインします（ポート 22）。

ステップ 2 **/opt/cucm** フォルダに移動し、次のコマンドを入力します。

```
./cupm-app-service.sh stop
```

ステップ 3 Prime Collaboration Provisioning アプリケーション サーバで、次のコマンドを使用して Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを停止します。

```
ps -aef | grep startcupm
ps -aef | grep nice
kill -9 <startcupm process id>
kill -9 <nice process id>
```

ステップ 4 データベース サーバで、次のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/postgres/9.0/bin
```

ステップ 5 次のコマンドを実行します。

```
./pg_dumpall -o -Upmadmin /<backup_directory_name>/<backup_file_name>
```

値は次のとおりです。

- pmadmin：postgres ユーザ ID。
- *backup_directory_name*：バックアップ ファイルを置く場所のディレクトリ名。
- *backup_file_name*：バックアップはこのファイル名で作成されます。

ステップ 6 バックアップ フォルダで、次のファイルとディレクトリのコピーを作成します。

- /opt/cupm/sep/dfc.properties
- /opt/cupm/sep/ipt.properties
- /opt/cupm/sep/dfc.keystore
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/conf/login-config.xml
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/deploy/dfc-ds.xml

ステップ 7 Prime Collaboration Provisioning アプリケーション サーバで、次のコマンドを使用して Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを開始します。

```
cd /opt/cupm
./cupm-app-service.sh start
```

分散データベース用の Provisioning の復元

新規インストールに復元する場合は、同一 IP アドレスと新規 IP アドレスのどちらを使用する場合でも、この手順を開始する前にシステムを新規インストールで起動して稼働させます。

この手順を実行するには、Provisioning データベース（PostgreSQL データベース）に管理者レベルでアクセスできる必要があります。

データベースを新しいシステムに復元する場合は、次のポートが他のアプリケーションで使用されていないことを確認してください。

- dfc.jboss.port=46008

- dfc.postgres.port=5432
- dfc.nice.rmi.registry.internal.port=46001
- dfc.webport=80

ポートが他のアプリケーションで使用されている場合は、対象のポート番号を空いているポートに変更する必要があります。 これらの設定は、\sep\dfc.properties ファイルに定義されています（インストール中にデフォルトの場所を受け入れた場合、インストール ディレクトリは /opt/cupm になります）。

また、次のいずれかの設定でシステム名を変更する必要があります。

- dfc.postgres.host=<system name>（データベースが 1 つのシステム上にある場合）
- dfc.postgres.hostlist=<system name>（データベースが複数のシステム上にある場合）

データベース サーバのデータベースの復元

手順

ステップ 1 SSH を使用してルートでログインします（ポート 22）。

ステップ 2 **/opt/cucm** フォルダに移動し、次のコマンドを入力します。

```
./cupm-app-service.sh stop
```

ステップ 3 Prime Collaboration Provisioning アプリケーション サーバで、次のコマンドを使用して Provisioning サービス Apache、JBoss、および NICE を停止します。

```
ps -aef | grep startcupm
ps -aef | grep nice
kill -9 <startcupm process id>
kill -9 <nice process id>
```

a) nice プロセスが postgres 接続をまだ保持しているかどうかチェックするには、次のコマンドを入力します：

```
ps -aef
```

b) 次のプロセスを検索します：/opt/cupm/jvm/bin/java -server -classpath /opt/cupm/sep/lib/dom.jar:/opt/cupm/sep/lib/jaxbapi.jar:/opt/cupm/sep/lib/jaxb-impl.jar
プロセスが実行中の場合は、次のコマンドを入力します。

```
kill -9 <Process-Id found earlier>
```

ステップ 4 同一インストールに復元する場合は、次の手順に進みます。 新規インストールに復元する場合は、バックアップ ファイル（bak）を /mnt フォルダに貼り付けます。

ステップ 5 次のディレクトリに移動します。

```
cd /opt/postgres/9.0/bin
```

ステップ 6 次のコマンドを実行します。

```
./CUPM-restore.sh <username> <password> /mnt/<backup_file_name>
```

ここで、username は PostgreSQL 管理者のユーザ名です。 デフォルトの管理者ユーザ名は pmadmin です。パスワードは globaladmin に入力したものと同じです。

ステップ 7 同一インストールに復元する場合は、次の手順に進みます。 新規インストールに復元する場合は、次のバックアップ ファイルをコピーします。

- /opt/cupm/sep/dfc.properties
- /opt/cupm/sep/ipt.properties
- /opt/cupm/sep/dfc.keystore
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/conf/login-config.xml
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/deploy/dfc-ds.xml

ステップ 8 次のコマンドを使用して、Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを開始します。

```
cd /opt/cupm
./cupm-app-service.sh start
```

アプリケーション サーバのデータベースの復元

手順

ステップ 1 同一インストールに復元する場合は、次の手順に進みます。 新規インストールに復元する場合は、次のバックアップ ファイルをコピーします。

- /opt/cupm/logs/install.log
- /opt/cupm/sep/dfc.properties
- /opt/cupm/sep/ipt.properties
- /opt/cupm/sep/dfc.keystore
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/conf/login-config.xml
- /opt/cupm/jboss/server/cupm/deploy/dfc-ds.xml

ステップ 2 opt/cupm/sep/dfc.properties のデータベース サーバの IP アドレス（postgres host）を更新します。

ステップ 3 opt/cupm/jboss/server/cupm/deploy/dfc-ds.xml のデータベース サーバの IP アドレス（postgres host）を更新します。

ステップ 4 次のコマンドを使用して、Apache サービス、JBoss サービス、および NICE サービスを開始します。

```
cd /opt/cupm
./cupm-app-service.sh start
```

Provisioning ユーザ インターフェイスを使用したバックアップのスケジュール

Provisioning ユーザ インターフェイスを使用して、Provisioning データベースの定期バックアップを作成できます。 バックアップを実行するには、管理者としてログインする必要があります。
Provisioning データベースのバックアップを作成するには、次の手順を実行します。

手順

ステップ 1 [管理（Administration）] > [システムメンテナンス（System Maintenance）] > [バックアップ管理（Backup Management）] を選択します。

ステップ 2 [バックアップ管理（Backup Management）] ページで [新規（New）] をクリックします。

ステップ 3 [バックアップの新規作成（Create New Backup）] ページでバックアップ タイトルを入力します。

ステップ 4 [バックアップ接続（Backup Connection）] ドロップダウン リストから、バックアップ ファイルの保存先として [SFTP]、[FTP] または [ローカル（Local）] を選択します。

a) [SFTP] または [FTP] を選択した場合は、次の詳細を入力します。

- バックアップ ファイルを保存する必要があるサーバの IP アドレス。
- バックアップ先までのパスとポートの詳細（SFTP のみ）。
- ユーザ名とパスワード情報。 SFTP または FTP パスワードのテストはオプションです。

b) [ローカル（Local）] を選択した場合は、バックアップ ファイルをローカル マシンに保存するロケーションを入力します。

ステップ 5 ローカルバックアップでは、[バックアップ履歴（Backup History）] ドロップダウン リストから、ローカル マシンに保存するバックアップ ファイル数を選択します。
デフォルト値は 2 です。 デフォルトでは、2 つの最新バックアップ ファイルを保存できます。 最大 9 つの最新バックアップ ファイルを保存可能です。

ステップ 6 スケジュールの詳細を入力して、バックアップをスケジュールします。
表示される時刻は、クライアント ブラウザの時刻です。 新規バックアップ ジョブのデフォルトの繰り返しタイプは [なし（None）] です。 デフォルト設定でバックアップ ジョブを作成すると、バックアップがただちに開始されます。

ステップ 7 スケジュールしたバックアップのステータス通知を受信する電子メール アドレスを入力します。
複数の電子メールアドレスをカンマで区切って入力できます。

ステップ 8 [保存（Save）] をクリックします。 [バックアップ管理（Backup Management）] ページの [バックアップ（Backups）] テーブルに、スケジュールされたバックアップが表示されます。

ステップ 9 [今すぐ実行（Run Now）] をクリックし、ただちにバックアップを実行します。

Prime Collaboration Provisioning は、バックアップ開始前にメンテナンス モードに入ります。 すべてのログイン ユーザに対して、スケジュールされたバックアップの開始 10 分前に、Prime Collaboration Provisioning からログアウトされることを知らせる通知が表示されます。 ユーザは、バックアップ開始前に作業を保存してログアウトする必要があります。さもないと、自動的にログアウトされて Prime Collaboration Provisioning にアクセスできなくなります。

バックアップテーブルには、各バックアップ ジョブのステータスと履歴の情報が表示されます。[次の実行時（Next Run Time）] オプションには、次の定期スケジュールの詳細が示されます。

また、[前回の実行ステータス（Last Run Status）] 列には、前回実行したバックアップ ジョブのステータスが表示されます。バックアップ ジョブのステータスは、[スケジュール済み（Scheduled）]、[処理中（In Progress）]、[成功（Success）] または [失敗（Failed）] です。

バックアップ ジョブがスケジュールされた時間に達すると、前回の実行ステータスが [スケジュール済み（Scheduled）] に変更されます。 さらに 10 分後にメンテナンス モードに入ると、ステータスは [スケジュール済み（Scheduled）] から [処理中（In Progress）] に変化します。

バックアップ ジョブが完了すると、ステータスは [成功（Success）] または [失敗（Failed）] になります。

任意のバックアップ ジョブの履歴を表示するには、[実行履歴カウント（Run History Count）] をクリックしてダイアログボックスを開きます。 バックアップの開始時刻、終了時刻、ステータス、ファイル サイズを表示できます。 また、実行履歴ログを削除できます。 バックアップ ログが削除されてもバックアップ済みファイルは削除されません。

バックアップ ジョブの管理

スケジュールされたジョブでは、次の操作を実行できます。

- 編集と削除：[スケジュール済み（Scheduled）] と [処理中（In Progress）] のステータスでは、[編集（Edit）] および [削除（Delete）] オプションが無効になります。 バックアップのステータスが [スケジュール済み（Scheduled）] と [処理中（In Progress）] の場合は、そのバックアップ ジョブを編集または削除することはできません。 同時に編集できるバックアップ ジョブは 1 つだけです。
- キャンセル：キャンセルできるのは、ステータスが [スケジュール済み（Scheduled）] または [処理中（In Progress）] の実行中のバックアップ ジョブだけです。